

2006年度 子ども教育研究所事業報告

講演会・シンポジウム・自治体との連携プロジェクト報告

- (1) 大学創立40周年記念「小学校国際教育フォーラム」
- (2) 「第5回 CREATIVE 保育講座」
- (3) 三宮サテライト教室「幼稚園：冬のプログラム」
- (4) 三宮サテライト教室「小学校：冬のプログラム」
- (5) 三宮サテライト教室「保育園：冬のプログラム」
- (6) 「基礎体力パワーアップ大作戦」

山本 裕之

YAMAMOTO Hiroyuki

子ども教育研究所は2004年4月1日に教育研究センターのひとつの研究所として開設した。発達教育学部児童教育学科に併設され、所長は児童教育学科学科長が兼務している。研究所には幼児教育部門と初等教育部門があり、学科専任教員からの研究員と学外からの客員研究員で構成されている。

2006年度の事業として、上記表題の6項目の事業を行った。ここに、その概要を報告する。

(1)「小学校国際教育フォーラム」

大学創立40周年記念事業の一環として、昨年度の「シュタイナー教育フォーラム」につづき、「21世紀の小学校教育の在り方」をテーマにフォーラムを開催した。昨今、世界的な規模での高度情報化社会の進展に伴って、教育分野においても共通の問題に直面している。そこで、今回は、本学と提携しているカナダ・アメリカ・中国の小学校長に、日本の小学校長を交え、各国が抱える課題解決に道筋を探ってみた。教育現場の最前線におられる校長先生の参加を得て、さらに講演会・シンポジウムが盛り多くなった。

基調講演の内容は、議論の前提として小学校教育の基盤的な哲学に関するものとしてお願いした。また、シンポジウムでは、「今、小学校に求められるもの」という観点から各パネリストが自国の小学校教育の目指すものと、その課題について発表して頂いた。その後、指定討論者を中心にフロアからの質疑も含め討議を行った。文化の違いを超えて、共通の課題解決への議論の展開となり、大変有意義なフォーラムとなった。

日時 2006年7月1日(土) 13:30~16:45
会場 神戸親和女子大学 4号館 421号教室
参加者 小学校教諭、神戸市教育委員会、本学学生、本学教員等約200名。

プログラム

1. 開会挨拶
神戸親和女子大学長 山根 耕平
2. 基調講演
「21世紀の小学校教育」
講演者 Clive Beck (クライヴ・ベック) 氏
(カナダ・トロント大学大学院教授)
通訳 桜井 みどり氏
3. シンポジウム
「今、小学校教育に求められるもの」
パネリスト
Elizabeth Morley (エリザベス・モーレイ) 氏
(カナダ・トロント大学附属小学校長)
Catherine Anderson (キャサリン・アンダーソン) 氏
(アメリカ・リッチモンド小学校長)
熊梅 (ジョン・メイ) 氏
(中国・東北師範大学附属小学校長)
鈴木 直人 氏 (日本・同志社小学校長)
コーディネーター
山根 耕平 (本学学長)
指定討論者
John P. Miller (ジョン・ミラー) 氏
通訳
安藤 敦子 氏 (リッチモンド小学校教諭)
桜井 みどり 氏

4. 閉会挨拶

子ども教育研究所長 山本 裕之

以下に、当日の「基調講演」、ならびに「シンポジウム」の詳細を紹介する。

大学創立40周年記念

小学校教育国際フォーラムの開催について

山根 耕 平

大学創立40周年を記念して「小学校教育国際フォーラム」を開催いたしました。

2004年のイリノイ大学のB. スポディック博士を招いての幼児教育に関する「国際フォーラム」、そして2005年のカナダ・シュタイナー学校代表のダイアナ先生を招いての「シュタイナー・フォーラム」につづくもので、本学に新たな歴史のページを開くものと期待しています。主催はいずれも児童教育学科・子ども教育研究所です。

今年度は小学校教育に焦点を当てた講演会・シンポジウムにしたのは、多くの国で小学校教育において大きな問題に直面しており、それぞれの国がその問題への取組みと克服を手立てについて意見をもちより議論をすることはたいへん有意義なことだと考えたからです。

まず、基調講演として、トロント大学大学院教授で、トロント大学の教員養成プログラムの責任者であるC. ベック博士に「21世紀の小学校教育」と題してご講演をお願いしました。次に、「今、小学校教育に求められるもの」と題してシンポジウムを開きました。講師として、カナダからトロント大学附属小学校のE. モーレイ校長、アメリカからリッチモンド小学校のK. アンダーソン校長、中国から東北師範大学附属小学校の熊梅校長、そして日本から同志社大学附属小学校の鈴木校長の各先生方をお招きしました。指定討論者として、現在、本学の招聘教授であるホリスティック教育の権威であるJ. ミラー博士に、通訳は、桜井みどりさんと安東敦子さんをお願いしました。コーディネーターは山根が務めました。シンポジウムでは、先生方から各国の事情、そして意見が発表されました。以下、私なりに基調講演とシンポジウムの内容を簡潔に要約して報告させていただきたいと思います。

基調講演：「21世紀の小学校教育」

人生において幼少期はきわめて重要な時期です。小学校教育は、中学校や高等学校に比べて授業方法も工夫しやすく、楽しく面白くできるのも特徴です。カナダでは、すべての学校を幼稚園のように楽しくすべきだという意見もあります。小学校では、さらに、生徒たちは同じ先生のもとにすべての教科を他の生徒と一緒に学びます。先生も生徒たちを理解しやすく、クラスや学校にコミュニティ感覚も生まれやすく、学習が自然な形で楽しい活動になります。

ここでは、小学校教育の在り方について、2004年から2005年にかけて、トロント大学教育大学院で行った新任教師対象の研究調査の結果をもとにお話しします。22名のいずれの教員もOISEの教員養成プログラムを学んだ卒業生です。小学校教育においてかれらがもっとも重視したのは、(1)授業計画、(2)評価の方法、(3)教室経営、の3点です。この点を踏まえ、わたしは、これからの小学校教育において以下のことを強調したいと思います。

まず第1に、教師が何を優先すべきかを認識した上で、教育的な選択をする自由と責任をもって、授業を計画することです。カナダでは、この点で教師に大きな裁量権があります。教師に自由と責任がなければ、ほんとうによい授業は成立しないからです。また、計画を立てる際には、1年間の長いスパンの中でどのトピックを扱うかが重要になります。

第2に、生徒の評価方法を学ぶことが重要です。何を見て、どう評価するか、が大切です。

また、生徒の評価方法を、形式的なものにせず、多様に、しかも、個々人に合わせたものにすることも必要です。子どもたちそれぞれの才能や実績を認めることが大切です。第3に、学級経営の問題です。個人学習、小グループ学習、学級全体が参加する活動をバランスよく組み合わせる学級運営が大切です。そのことによって、学習効果が高まり、強いコミュニティ感覚が醸成されるからです。こうしてはじめて、わたしたちは、生徒と関わり、その人間的成長を最大限に引き出すことができます。

しかしながら、こうした方法を可能にするためには、教師には多様で複雑な役割が求められます。私の考えでは、教師たちが学校全体のサポートを得ることができたときはじめて、こうした責任を果たすことができるのです。

シンポジウム：「今、小学校教育に求められるもの」

E. モーレイ先生

わたしの学校はトロント大学の附属小学校で、いわゆる実験学校です。とくにデューイの考え方をベースに教育課程は編成されており、探求、発達、そして安全という点に焦点を絞っています。

わたしの学校の教育について、もう少し詳しく述べていきます。

教育の目標は、健康な子どもを育てることです。勉強を教えるとかではなく、子どもを全人的に育てることが大切です。子どもたちが将来仕事に就くための、市民になるときのための、レジャーを楽しむための、道徳的な目的のための、そうした知識と技能を培うことです。民主的な社会においては、学校は子どもに勉強の世界をこえていろいろなことを教えなければなりません。また、小学校教育では、子どもたちは「つながり」の感覚を身に付けなければなりません。子どもと先生、子どもと学ぶ対象、子どもと子ども、そうした「つながり」が大切です。子どもたちは他の子どもとつながって学ぶとき最もよく学ぶことができます。カナダでは、今日、テストやそのスコアばかりが注目されています。子どもたちも教師もストレスを強めています。

スタンフォード大学のE. N. ノッディング教授が「幸福と教育」を出版しましたが、幸福と学習の間のつながりをそらすことで、学校における学習経験がかえって弱まっている、といいます。教育の目的は何かということを考える必要があると思います。他の発表者の方にもこのことについて意見が聞けることを願っています。

K. アンダーソン先生

わたしはアメリカのオレゴン州ポートランドにあるリッチモンド小学校のことを中心にお話します。リッチモンド小学校は、アメリカで最初の日本語イマージョン教育を行っている、就学前教育の幼児から小学校5年生まで、生徒数388人の公立学校です。今年、アジアサイティから国際教育優秀賞をいただきました。リッチモンド小学校は多文化・多言語をもつ学校で、とくに、アジア系の生徒が31パーセントになります。ここでは、英語と日本語の授業を半々で行っています。教師は17名で、保護者が支払う授業料は、年間ほぼ41万円です。課題としては、年齢と学年に合った発達上適切な教育課程を保障すること、新しいカリキュラムを学ぶ時間を教師に保

証すること、1つの限られた範囲のテストで教科学習の結果を定義すること、が挙げられます。

入学は志願者が多いので、くじ引きでします。とにかく、リッチモンド小学校は、子どもたちに暖かい援助的な学習環境と、刺激的で強力で面白いバイリンガルのカリキュラムを提供しており、とりわけ、多文化教育を推進しグローバルの世界観を育成しようとしています。リッチモンド小学校の5年生が日本の富山、静岡や神戸などを訪問します。逆に、日本の5年生がアメリカを訪れます。日本との交流を深めているのです。また、リッチモンドでは、放課後や夏休みに楽しい経験学習を取り入れています。5歳から12歳の子どもが参加できるものもあります。一方で、こうした学校では、学力の低下が心配されますが、リッチモンドの子どもたちは高い学力を示しています。それは優秀な先生方が多いからだし、第2外国語を学ぶとき教科や概念が深まり、そのことでより深く学べるからです。さらに、親の協力支援が成功の原因といえるでしょう。

しかし、アメリカには1つの問題があります。政治が学校を自由市場で競争させようとしています。自称教育大統領といいながら、教育関連の予算を40%も削減した大統領がいました。年々、連邦政府や州からの補助は削減される傾向にあり、苦勞をしています。学校は、今、予算を切り詰め、自由市場の中で他の学校やチャータースクールなどとの競争を余儀なくされています。学校はたいへん厳しい状況に置かれています。

熊梅先生

わたしは中国東北師範大学附属小学校の校長です。筑波大学大学院の博士課程で数年学びました。今日は、中国小学校の改革動向と発展方向についてお話しします。

まず、中国の教育は平和、開放、協力、調和の発展をめざしています。2005年に北京で、小学校教育についてシンポジウムを開きましたが、そのテーマは、「小学校教育の調和的発展を促進する」というものでした。このときの「北京宣言」について説明して、私の発表とします。

教育の調和的発展の基本は、教えることと学ぶことに現れ、教師と学ぶ者の融合が必要である。

学校と家庭の協力が重要である。互いによい環境づくりを促進すべきである。家庭・学校・社会の疎通のプラットフォームをたてる。その三方信頼をたて、

お互いに補う調和的教育生態系統を建設することが重要である。

教えることと学ぶことの関係を科学的に処理し、調和的教室授業構築することが重要である。

発展していない地域や、農村小学校の教育に力を入れることが重要である。

以上が「北京宣言」の内容です。

鈴木先生

私は同志社小学校の鈴木です。同志社小学校は同志社大学の附属小学校として今年4月に開設されたばかりです。まだ、実績がないので、今の子どもをどう見るか、それに学校はどう対応すべきかについて述べたいと思います。

はじめに、今の子どもたちについてお話したいと思います。パワーポイントにしたがって説明します。現代の子どもの特徴は、親の前で「いい子」を演じる、が、親の目が届かなくなると豹変する、というものです。ものわかりのよい子が、急に傍若無人の振る舞いをするのです。しかし、ほんとうによい子とは、必ずしも親の言う通りにする子ではないのです。イタズラをする時もあります。何に対しても好奇心があり、主体性のある子です。もちろん、思いやりもある子です。

といっても、今は子どもにとってもストレス、過緊張の多い時代です。とくに、親の子どもに対する関心が増大することは、よい子であることが逆に、また、ストレスとなり、いじめをしたり攻撃的となる原因にもなります。

今日、日本の子どもたちの学力低下が叫ばれています。OECDの調査でも、国語や数学の成績が国際比較でどんどん落ちていきます。たしかに、学力は低下しています。しかし、それは勉強が面白くない、分からない、自信がないなどによるものが多いので、勉強へのモチベーションが下がっていることが一番の問題です。勉強時間を増やせば解決する問題ではありません。だから、まず、学校を楽しくする必要があります。学校へ行くのが楽しいと思うような施策、仕掛けが必要です。

おわりに、現代の小学校に何が必要かといえば、子どもたちと真に向き合うあい、見守ること、そして、子どもたちが素晴らしい能力を持っていることを認めることではないでしょうか。同志社小学校では、学校が楽しい、勉強が楽しい、興味・好奇心が旺盛、ということをもットーとしています。

討 論

ここでは、いろいろな意見が交わされましたが、紙面の関係で主なものだけを紹介させていただきます。

(フロア)

学校改革を阻むものということでお尋ねします。校長・職員が頑張っても、保護者や地域の人がみんな理解がありすばらしいとは限らないし、自分の子どものことしか考えない親もいます。それにどう対応されていますか。

(モーレイ先生)

学校の中でいかにコミュニティづくりをするかが大切だと思います。同志社小学校を訪問したとき、学校が一つの部屋になって教室に分かれていないのが印象的でした。わたしは、つねに親が自由に学校に来れる状況をつくるのがいいと思います。

(アンダーソン先生)

わたしの学校では、親と学校のかかわりは多いと思います。とにかく、親に教室を見てもらう、体験してもらう、そこから親の理解を得るようにしています。2番目に、親にデータを見せるようにしています。学力だけでなく、教師や生徒がなにを求めているか、見せるようにしています。後は、わたしも大学院にいて勉強している、任してください、といっています。

(熊梅先生)

学校・地域・保護者の意見が対立したときは、1つには、個人別に相談します。2つ目は、専門的な会議を開いたりして、保護者との関係を調整します。ただ、問題が起こったとき、学校の責任はどこまであるのか、特定するのはむずかしい。ときには、弁護士に相談することもあります。

(鈴木先生)

月1回、保護者会を開いて学校を知ってもらうように努めています。また、保護者による後援会もつくりました。ただし、学校のことには口出ししない、後援するだけという会です。私学なので、建学の精神を理解してもらうことが一番大切なのです。今のところ、大きい問題は起こっていません。これから、小学校と保護者がいかにタッグを組んでいくかが大切になると思います。

(司会)

ここで、今の議論の流れから「つながり」(Connection)についてお伺いしたいと思います。

(J.ミラー先生)

「つながり」という概念は、ホリスティック教育の本質だと思います。つながりをつくるということは、とても大切です。子どもと子どものつながり、先生と子どものつながり、先生と保護者のつながりだけでなく、子どもと教科のつながり、教科同士のつながりも、どう学習を意味あるものにしていくかという点で重要です。また、地球や環境とのつながりもあります。さらには、自分の心とのつながりをどうつけていくか、ということも非常に大切です。古代では、“thinking heart”とあって、「考える心」という言葉がありました。考えることと心が分かれていなかった時代のことです。まさに、こういった心を育てる、つながりを育てることが教育の本質だと思います。

(E. モーレイ先生)

子どもとかかわって「つながる」ということが大切で、その「つながり」の中から、自分のことをわかってもらっているという感じ、子どもは安心するのだと思います。そこから、リスクを負っても何かをやってみるとか、間違っても大丈夫だという気持ちが出てくるのだと思います。教室でも、知的なリスクを負っても大丈夫だと思うのは、安心があってはじめてできることだと思います。

(アンダーソン先生)

「つながり」は人生に成功をもたらすものだと思います。われわれはときに1つの答えを求めてしまいがちになりますが、間違いをしてもいい、間違いを犯すことから成功が生まれる。それが、これから素晴らしい大人になる道だと思います。今、わたしたちは45人の子どもたちを連れて日本に来ていますが、みんなあまり日本語を使わないので、聞くと、間違うと怖いというのです。とくに、日本語のよくできる子がそう言うのです。折角、習ったのだから、練習しなさい、間違ってもいいからとみんなに言いました。次の日から、みんな勇気を出して日本語を使いました。日本とわたしたちの学校の「コネクション」を大切にしたいと思います。

(熊梅先生)

生徒と先生の心のつながりが一番大切だと思います。心のつながりについては基本的なことがあります。愛情、思いやり、話をきちんと聞くこと、自信をもつこと、などです。それらが、心のつながりの基本だと思います。

(鈴木先生)

同志社も「つながり」を重視しています。コミュ

ニケーションと言い換えてもいいかと思います。1年生から英語を教えています。それは英語のTOIECのスコアを上げようとかいうためではなく、楽しい英語の授業をして外国の人とコミュニケーションすることを楽しんでほしいのです。また、同志社は建物自体が「つながり」を考えて建てられています。

(J. ミラー先生)

「つながり」ということで付け加えさせてください。「つながり」ということでは、宇宙もすべてつながっているというのが現実です。この現実から教育を考える必要があるのではないのでしょうか。

大学創立40周年を記念しての国際小学校フォーラムは盛会に終わりました。遠いところからきていただいた各講師の方に、紙面を借りて、改めてお礼申し上げます。また、準備と運営を支えていただいた本学の教職員の方々にも、厚く感謝申し上げます。

こうした積み上げが社会からの評価を受け、本学の実績として歴史を刻んでいくことになるのだと思っています。この意味で、40周年はまさに41年目に向けての新たなスタートの年でもあります。今年の5月にも、幼児教育の国際フォーラムを計画しています。みなさん、乞う、ご期待を！

(この講演会・シンポジウムの内容については、記憶やメモの関係で、内容が簡潔すぎたり、順序に後先があったりするかもしれません。ご了承下さい。)

(2) 「第5回 CREATIVE 保育講座」

大学創立40周年記念事業の一環として、待井和江先生をお迎えして連続講座を開催した。

現在、保育の現場では規制緩和の流れの影響を受けながらも、幼稚園・保育所の独自性を生かしつつ、保育の内容を磨き質的な向上を図っている。混沌として方向性が見定めがたい今、幼稚園と保育所の歴史を振り返り、将来の展望を明らかにしていくことは大きな意義があると考えている。

「子どもたちにとって最善の利益とは何か」の視点に立ち返って、保育に携わる者たちが共に、就学前の乳幼児教育について考え合う機会となった。

講座テーマ 「子どもの最前の利益を求めて」

講師 待井 和江 氏 (本学客員教授)

日時・講義内容

第1回 2006年 7月22日(土) 13:00~14:30

「幼稚園・保育所の独自性」

第2回 2006年 9月30日(土) 13:00~14:30

「幼稚園・保育所の時代的変遷」

第3回 2006年 11月18日(土) 13:00~14:30

「これからの乳幼児教育・保育の展望」

会場 神戸親和女子大学 4号館 421号教室

参加者 保育士、幼稚園教諭、本学学生、本学教員等約160名。

(3) 三宮サテライト教室「幼稚園：冬のプログラム」

～幼稚園における教師の役割を考える～

現在、幼児期における教育問題はさまざまな様相を呈している。いつの時代においても保育者は、日々悩みつつ保育を展開しているという現実は変わらないまでも、現状の保育現場が持つ問題は多様化また複雑化している。そこで、このプログラムでは保育の現場が抱えている問題について、参加者全員が同じ保育者としての悩みや思いを共有し、未来ある子どもたちのための保育を考える会として開催した。

石岡由紀准教授が、人物描画からちょっと気になる子どもの発達について話題提供した後、79名の幼稚園の先生方が、6～8名のグループに分かれ、各々の抱えている事例を挙げながら討議を行った。その後、各グループの代表者により報告が行われ、未来ある子どもたちの保育を考える大変有意義な会となった。

日時 2007年1月26日(金) 18:30~20:30

場所 三宮サテライトキャンパス
(ミント神戸17階)

内容 開会挨拶
(山本 裕之/子ども教育研究所長)
話題提供(石岡 由紀 /本学 准教授)
「ちょっと気になる子どもの対応をめぐって」

～人物描画にみる子どもの発達～

グループ討議
(中橋 美穂/本学 准教授)

総評 (桐島 和子/本学 教授)

参加者 公私立幼稚園教諭79名

(4) 三宮サテライト教室「小学校：冬のプログラム」

～心に元気がわく学級づくり～

今、教育のありかたについての様々な問題が提起されている。それらをどのように受け止めて、教育活動にどのように具体化していけばよいのか。そうした日々の実践的な悩みは尽きない。こんなときだからこそ、共に悩みや思いについて語り合い、学び合う機会が必要ではないだろうか。元気がわく学級づくりをめざして新しいスタートをきるために。

このような趣旨のもと、本学教授：坂本達明氏による講話「学年始めの学級作り」の後、本学教員も参加し、活発な討論が行われ意義ある懇談会となった。

日時 2006年2月2日(金) 18:30~20:30

場所 三宮サテライトキャンパス
(ミント神戸17階)

内容 講話「学年始めの学級作り」
(坂本 達明 /本学 教授)

懇談会

テーマ「心に元気がわく学級づくり」
担当教員(新保 真紀子/本学 准教授)
(櫻本 明美 /本学 教授)
(坂本 達明 /本学 教授)
(斉藤 勝 /本学 教授)

参加者 公立小学校教諭27名

(5) 三宮サテライト教室「保育園：冬のプログラム」

～親との心のふれあいを求めて～

乳幼児期における親と子のふれあいの大切さと言うまでもないことであるが、昨今の保育や、子育ての状況においては、心いたむニュースが多くみられる。子どもの心がはずみ、きらきらと輝くひとみを保障することは保育者としての使命である。

親と子どもの支援を視野にいれ、子どもの最善の利益を考慮しながら、日々の保育の問題を、保育者がお互いに共有し合うひとときを持ちたいと考え、ここに企画したしだいである。

本学教授：坂根 美紀子氏によるコーディネーターのもと、参加された120名の保育士がグループに分かれ、テーマ「保護者の対応の仕方を探る」について討議を重ねた。その後、各グループの代表者が討議内容を発表し、それぞれの課題をお互いに共有し、その解決方法を探る良い機会となった。

日時 2006年2月23日(金) 18:30～20:30
 場所 三宮サテライトキャンパス
 (ミント神戸17階)
 内容 開会挨拶
 (山本 裕之／子ども教育研究所長)
 コーディネーター
 (坂根 美紀子 /本学 教授)
 テーマ「保護者の対応の仕方を探る」
 グループ討議
 (田中 千恵 /本学 講師)
 総評(吉田 ちず子 /本学 教授)
 閉会挨拶(山根 耕平/本学 学長)
 参加者 公私立保育士120名

的としている。具体的には、小学生児童の体力向上を目指した取り組みを推進していくと同時に、体力と生活習慣との関連も検証しながら基礎体力のパワーアップを目指している。

豊岡市教育委員会から本学への調査依頼項目は、下記の6項目である。

- ① 生活実態アンケートの作成と分析
- ② 新体力テストの分析
- ③ 運動プログラムの開発
- ④ 結果分析による運動指導
- ⑤ 長期休業中における運動指導
- ⑥ 指導者研修

次に、「平成18年度基礎体力パワーアップ大作戦」の年間実施計画を紹介する。

尚、この企画の詳細な報告は、2007年度「子ども教育研究所事業報告」で取り上げる予定である。

(6) 「基礎体力パワーアップ大作戦」

この企画は、豊岡市教育委員会と本学が連携し、豊岡市内の小学生児童の体力向上を目指すことを目

「基礎体力パワーアップ大作戦」年間実施計画

	実施校	教育委員会	大学	合同
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト会議 ・趣旨説明 ・事業計画書・用具購入計画書作成・提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・実施校の選択(報告) ・プロジェクト会議 ・趣旨説明 ・事業計画書・補助金交付 ・関係者書類作成・提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト会議 ・趣旨説明 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・新体力テスト(3種目)実施 ・生活実態調査(下旬) ・両テスト集計 	<ul style="list-style-type: none"> ・記録用紙集約 	<ul style="list-style-type: none"> ・記録のデータ化 ・結果分析 	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト会議(5/22) ・趣旨説明 ・生活実態調査作成
6月				
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラムの実施 		<ul style="list-style-type: none"> ・生活実態調査集計 ・報告書及びプログラム作成(指導) 	<ul style="list-style-type: none"> ・分析結果報告(or7月)
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・月間実施状況調査表提出 			
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・縄跳び検定の実施 			
10月				
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・体力テスト(3種目)実施 ・生活実態調査 ・プログラムの実施 ・月間実施状況調査表提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・記録用紙集約 	<ul style="list-style-type: none"> ・記録のデータ化 ・結果分析 ・報告書及びプログラムの見直し 	
12月				<ul style="list-style-type: none"> ・分析結果報告
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・会議 ・結果分析 ・縄跳び検定の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・会議 ・結果分析 	<ul style="list-style-type: none"> ・結果分析 	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト会議(今後の調査について)
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・事業報告書・用具購入報告書作成・提出 ・月間実施状況調査表提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業報告書 ・補助金交付関係書類作成 ・提出 		<ul style="list-style-type: none"> ・次年度(19年)の計画案作成
3月				